

「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学工学部1年 荻野 瑛穂

①学習成果

3週間集中的に緊張感をもって中国語を学ぶことで、自身の中国語の文法の理解が深まり、会話能力も確実に上がったと感じている。私は今年の4月から第二外国語として中国語を選択し、半年間中国語を勉強した後にこのプログラムに参加した。元々一番レベルの低いクラスに配属されていたが、自分への挑戦としてもう一つ上のレベルへとクラスを変更し、3週間中国語を勉強した。知らない文法や会話の中でのフレーズを教わる度、語学学習の長い道のりを感じながらも、一つ一つ課題をクリアしていかななくては進まない、と自身を奮い立たせて積極的に学習を行った。結果、街中で中国語を話す人の会話の一部を聞き取ることができるようになったり、電車の中国語アナウンスを理解できるようになったりと、小さいことではあるが確かな成長を感じることができた学習になった。

「広東語が主に利用されている香港という場で、なぜ普通語を勉強するのか」という問いが、このプログラムを通して散見された。普通語を勉強するためには、やはり普通語が一般的に話されている中国本土で勉強するのが良いと思う。しかし、普通語を勉強しながら、広東語の飛び交う社会に飛び込むことによって、中国語というものの多様さを感じることができた。また、香港の人々が普通語・広東語・英語を自在に利用している社会で生活することで、香港の多言語文化を身をもって体験することができた。これによって、日本には絶対に得られなかったであろう、「言語」というものの多様さを実感した。また、凡そ日本語しか通じることのない日本という国の「異常さ」も発見することができた。この発見は自身の言語学習において非常に大きなものであったと思う。

②海外での経験

私はこのプログラムに参加するまで、海外に行ったことが無く、今回生まれて初めて日本ではない土地の気候、文化や社会を経験した。日本にいるときは、香港という地域や文化に足して漠然としたイメージしかもっていなかったが、実際に、香港の人々の温かさ、想像を違つてとても過ごしやすい気候、そして非常に便利で画一化された社会システムを体験することで、日本とは違った「良い社会」というものを体験できた。

加えて、香港では「日本」というブランドがあるということに非常に驚いた。日本産であるだけで値段が高かったり、日本料理の店が非常にたくさんあったり、また、商品売るためにあえてパッケージに日本語が書かれている中国製品を多く見かけたりと、日本のものが「質の高いものを作り出す『良いもの』」として捉えられていることを初めて知ることができた。日本人であることを少し誇らしく感じることもできた。

③プログラム内容

3週間、密度の高い中国語学習を行うことで、①で述べたように、確かな中国語聞き取り・会話能力の上達を感じることができた。しかし、環境の変化や感染症の流行から体調を崩す人が多くおり、その点においてはもう少しゆっくりとしたスケジュールの設定を求める必要があるのかもしれないと思う。

いくつかの日においては、授業後に文化体験会が開催された。ここでは伝統的な書道や彫刻、月餅作りなど、香港の伝統文化を体験学習できる非常に良い機会であった。香港の伝統文化は、日本とよく似ているけれども、細かい部分で様々な違いがあり、とても興味深かった。

また、休日には香港中文大学の学生の方々に香港を案内していただいた。自分たちでは知りえない香港の名所

を巡っていただき、特に香港島の南東に位置する商店街では、ものごった返した小さい店がひしめき合っていて、香港という土地にやってきたのだという実感を、そこで確かに得たように思う。

④進路への影響について

私は今回の留学の目的として、中国語を学ぶことに加え、中国の産業や社会の現状を工学的な視点から観察し、その現状を身をもって体験するというのも目的として設定していた。香港での3週間の生活を経て、香港の社会における産業のレベルの高さを感じた。例えば、香港の街はすべてがMTRという電車でつながれており、しかも鉄道会社一つにまとまっているため、路線を変える際も、改札を通ることなくホームを移動できた。また、オクトパスカードというカードが想像以上に広く普及しており、どんなに小さな店においてもオクトパスカードを用いることができた。このようなことから香港で3週間生活して感じたのは、香港は、いろいろな分野について、独自のシステムを有しており、香港内でシステムが完結しているということである。日本の社会には、この完結さ・潔さが無いように思う。カード一つをとっても、システムが画一化されておらず、それが不便さを生み出している。今後、工学の分野で開発を行う際、どのようにこの完結さを生み出せるのか、ということ念頭に置きながら、開発を行いたいと思う。

また、②で述べたように、日本は海外において「日本」というブランドを有している。この「日本」というブランドを壊さないように、日本人としての良い意味での矜持を持って工学の分野で仕事を行えたらと思う。